



戦前期から戦後期における小学校音楽の形成過程

人文科学系・人間科学領域

藤井 康之

教授 FUJII Yasuyuki 修士(音楽)(武蔵野音楽大学大学院), 修士(教育学)(東京大学大学院)

■研究キーワード 音楽教育学, 音楽教育史

■主な所属学会 日本音楽教育学会, 日本音楽表現学会, 音楽教育史学会, 日本教育学会, 日本教育方法学会,

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.0d90f42880dc3977520e17560c007669.html>



研究者総覧

研究概要

現在の小学校音楽の存在意義が歴史的にどのように形成されてきたのかを研究しています。小学校音楽は学習指導要領において、戦後一貫して美的情操教育を目的として謳ってきました。さらに、美的情操教育を実現するために、音楽美を感受し表現できる確かな音楽知識と技能の習得の指導に力を入れてきました。この小学校音楽の目的と指導法は戦後期において形成されたのではなく、そのルーツは大正期まで遡ることができます。そこで、美的情操教育としての小学校音楽の目的と指導法を、大正期～戦後期にかけて小学校音楽界で活躍した音楽教師たちの言説を分析しながら、小学校音楽の形成過程を明らかにしています。この研究を通して、未来も小学校音楽が美的情操教育として存在する意義があるのか、このことを考える歴史的な知見を提供することをめざしています。



昭和20年代の小学校での音楽授業（読譜指導）風景

アピールポイント

- ①小学校に限らず、美的情操を養うために学校で音楽を学習するのだろうか？、という疑問が研究の出発点です。近年、音楽教育研究ではこの目的に疑義を呈する研究が出てきました。いうまでもなく、美的情操教育という目的は長い歴史の中で、先人たちによってつくられてきました。先人たちは、なにをめざし、どのような想いをもって、美的情操教育を主張してきたのでしょうか？先人たちが書き残したものを丹念に読み解きながら、現在までの学校音楽の軌跡を辿っています。そのことによって、学校音楽の目的に疑義を呈する研究に応えていければと思っています。
- ②美的情操教育には、19世紀にヨーロッパで興隆した「自律的な音楽」の影響が強くあります。「自律的な音楽」とは、音楽それ自体(音楽の構造や形式、リズム、メロディー、ハーモニー等の要素)に美的価値を置く考え方で、音楽美学という学問がベースとなっています。「自律的な音楽」は大正期に日本の音楽界・音楽教育界に受容されました。その当時の学校音楽は「徳性の涵養」のために音楽美が利用され、徳性の下位に位置づけられていました。そのことに憤った一部の先進的な音楽教師たちが、「自律的な音楽」を理論的根拠として、「徳性の涵養」から「美的陶冶」への転換を主張したのが美的情操教育のはじまりとなりました。それから100年以上も、学校音楽の目的は基本的に変わりません。はたしてこのままの目的でいいのか、歴史研究を通して考えていきたいと思っています。
- ③歴史研究は史資料の収集がとても大変です。今残されている限られた史資料に基づいて、研究をしなければなりません。しかし、このような大変さがありながらも、今、我々が立っている足元(歴史的にできた足元)を照らし出してくれるところに、歴史研究のおもしろさがあると思い、研究を続けています。